

ある地域人の生活観察  
「さらなるステップに挑むひと」の話

● Text : kana yamagishi

山岸 加奈

フリーライター

実は今回の記事には、9月に取材兼ねがね足を伸ばした「長崎県の九十九島遊覧で心が自然に帰る旅」日帰りバスツアーや道の駅について書こうと思いましたが、しかし、日帰り観光客の立場では表面的な情報しか収集できず、具体的な“人と人をつなぐ取り組みや仕組みづくりの糸口”を感じ取ることができませんでした。

今回のエッセイの題材では、私事の恥さらしを記述するのにずいぶんためらいがありますが、私の体験にしようと思います。

平成14年10月から社会人博士後期課程で大学に6年間在籍しました。イタリア・シエナ県を題材にした博士論文「田園地域の土地利用秩序におけるコンセンサス形成のシステム(仮)」を書き上げようと努力してきました。恩師には熱心に指導していただいたのですが、私自身の能力・実力不足により博士論文を断念しました。長い間アカデミックな論文研究の作業をばかりし続け、年齢に伴う実績をなにも構築できてはいませんでした。そのため、更なるステップアップに挑むスキル、新しい道を切り開いていく能力が培われていません。

私の場合、「どのような場面」で“人と人をつなぐ取り組みや仕組みづくり”にかかわっていくか、その背景となる「動機は何であるのか」という自問自答を繰り返しているのが現状です。

#### 今までとは異なるアプローチ

札幌在住時は、人との付き合いに恵まれており、人脈を通して、様々な仕事や次のアクションへ結びついてきたことが多かったように感じました。しかし、福岡に拠点を移した現在は、とあるコミュニティに入ろうと思っても、いわゆるコネや人脈がないというのが前提になっています。

そこで、今までとは異なる真逆のアプローチ、つまり“初対面の方々に面接される立場”として、ある営利目的のもとに集う企業コミュニティ(会社組織)に入ろうと思い立ちました。しかも全く未経験の分野での就職活動です。のりくらりと生きてきた私は、企業に採用されるのでしょうか。有言実行と思い、試行錯誤し、履歴書・職務経歴書を作成しました。学歴欄の記載事項が多いにもかかわらず、職務経歴は年齢に伴う実践力や実績がなにも構築されていない内容でした。



長崎県の道の駅「松浦海のふるさと館」の海産物

応募し書類選考から面接へと進めた職種をあげると、外資系保険金融A社の一般事務職、会社経営コンサルB社の営業職、商社C社の総務職、IT系D社の管理職、不動産系E社の営業アシスタント職、出版F社の総務職などです。結果は、多少なり合同面接・支店長との面接まで残ることができましたが、やはり内定までたどりつくものは全くありませんでした。

人材派遣会社やハローワーク、仕事探しのサポートセンター等の相談員の方々いわく、「いままでに企業での勤務経験や実績があまりにも少ないので、簡単には見つからないですね」とのこと。

数カ月のあいだ、就職活動を続けてきました。しかし、未経験の分野で志望動機を明解に表現できない状態では、当然ながら、企業から求められる対象者には当てはまらず、上手に立ち回れないままに月日が過ぎました。

### 社会的貢献ができる職能に向けて

語弊がある言い方かもしれませんが、専門知識を得る機会に身を置いたことのある者が、その知識・経験を活かした社会的貢献をせずに、のほほんと過ごしていいのでしょうか。今までお世話になった方々、評価していただいた方々に対して、あまりにも無責任すぎるのではないのでしょうか。

私は博士号取得者ではありませんので、「専門的な研究者」と言い切れる立場ではありません。しかし、中途半端な専門知識としても、これまでに得た知識・経験を活かし、社会的貢献ができる職能を自ら磨き上げることが大事なことはないかと思いはじめました。

### 今までの経験を活かすアプローチへ

九州で普段生活を営んでいると、地場の産業を下支えしているコミュニティ形成やネットワークづくりに魅力を感じています。例えば、企業経営者・行政・専門家等々の協働による、地域ブランド創出に向けた交流会、ビジネスマッチングを目的とした展示会や、ビジネスチャンスに恵まれない若手と企業の交流会等です。これらは、テレビや新聞のローカルニュースなどで報道されていました。

私を感じる魅力は、専門的な技能を有する人とその知識や経験を必要としている人とを、つなぎ合わせる取り組みや出会う機会づくりの質の高さに起因しているのではないかと思います。今後は、コーディネートする人たちの職能・業務内容を探求していきたいです(有力情報募集中!)

しかし、私自身が、担い手である地元の人にどのように接するか、地元企業、財界、行政にどのようにかかわっていくのか、どのような立場で飛び込めるのか、当事者としてかメッセンジャーなのか、まだまだ正直なところ、どのような手法でかかわっていくのかわかりません。

次回以降の連載エッセイでは、「地元のことを他地域の人に説明することの大切さ」「九州に住み始めて見えてきた北海道の良さ・悪さ」を話す上で、「人をつなぐ取り組みや仕組みづくり」をキーワードに、意見を発信し続けていきたいと考えています。

### ● Profile

山岸 加奈 やまぎし かな

札幌生まれ、福岡在住。フリーライター。イタリア国立フェラーラ大学建築学部留学、北海学園大学非常勤講師、北海道景観審議委員、北海道大学博士後期課程満期退学を経て、福岡に住む。おいしい食べ物と飲み物を求め、いろんな人との対話を持ちながら、お金では買えない豊かな生活を送ることが何であるのかを考える。